

2018 年 4 月 22 日（日）「十字架を負う」

マタイ 16:24-28（その 1）

24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。26 人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。27 人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。28 まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいます。」

【序論】

今日は、クリスチャンとして生きる上で避けて通ることのできない「十字架を負う」という事柄を扱います。「人もし我に従ひ來らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて、我に従へ」（文語訳）。何度も聞いてきた御言葉であり、これを座右の銘として掲げている方もおられるでしょう。「十字架を負う」という言葉は、いつしかノンクリスチャンの間でも使われるようになり、重い障害や試練に遭われた方が「これは私にとっての十字架です」と言っておられるのを聞いたことがあります。その方のお気持ちは察して余りあるものです。では、この言葉を使うに当たって、私たちは何を認識していなくてはならないのか。一度立ち止まり、主イエスが真に言っておられることの意味を探る必要があるのではないのでしょうか。「十字架を負う」ということが、クリスチャンの生き方の頂点であり、クリスチャンであれば例外なく求められる生き方であるとするならば、曖昧にしておいてよいものではありません。私は何度もこの御言葉を学んできましたが、尚も理解が不十分であるように感じているのです。「あなたは本当に十字架を負って生きているか」と問われます時に、その厳しさの前に顔を上げられなくなる思いが致します。しばらく前に当教会の中で開催した映画会で『復活』という作品を観ましたが、冒頭に登場する十字架刑の場面はまことに恐ろしいものでした。これを観ると、「十字架を負う」という言葉は容易く使うことはできないと思うようになります。私が神学校を卒業する時に語られたメッセージは、まさにこの箇所からでした。信仰の原点として、また献身の原点として、何度も立ち返らされる御言葉であり、その度に自分の生き方がそれにふさわしいかどうか問われます。

【本論】

本論 1. 十字架とは

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(16:24)

文脈では、ピリポ・カイザリヤでのペテロの信仰告白の後、主イエスがメシヤとしての使命は迫害されて死ぬことであると語り、それに対してペテロが主イエスを諫めたのに対し、今度は主が激しくペテロを叱責なさったという場面に続いています。主はここで、弟子たち全員に向けて、弟子の使命とは第一に「自分を捨てること」、第二に「自分の十字架を負うこと」だと教えられます。今日はこの二つの言葉の意味を探っていききたいと思います。しかし、両者は不可分な関係にありますので、「十字架を負う」という事柄を理解することで、いずれの意味も明らかになってくるでしょう。

私たちは信仰生活を続ける中で「十字架」という言葉に馴れすぎてしまいましたが、古代ローマで行なわれていた刑罰の恐ろしさを改めて知る必要があります。ローマ帝国では、国家反逆罪への刑罰として十字架刑を定めていました。これは、虫をピンで留めるところから考案された刑罰で、死刑囚は身ぐるみ剥がされ、手首と足首（くるぶし）を太い釘で打たれ、見せしめとして公衆の前に晒されました。死刑の考案者はどこまでも残酷なことを考えるようで、十字架に架かる前にも凄まじい拷問があります。まず、鞭打ちによって骨が露出するほど打たれる。あまりの衝撃に、この時点で絶命する人も少なくありませんでした。その後、自分が架かる十字架の横木を担いで、多くの人々が見ている前を歩かされ、備えられた縦木まで行き、そこで打ち付けられるのです。荒削りの縦木には角度の付いた腰掛けが設けられていて、体がずり落ちるようになっていました。自分の体重で肩が脱臼し、体が沈み、呼吸困難に陥りながら、上がったたり下がったりを延々と繰り返す。そして、福音書によれば、途中で足の骨が折られたようです。囚人は長ければ一週間ほど苦しんだ後に絶命しました。この非人間的な刑罰は、あまりに酷いため、後の時代に廃止されたと言います。

主イエスの時代、十字架刑はよく行なわれていましたので、「十字架を負え」と言われる時、聴衆はすぐにそれを思い浮かべ、身震いしたことでしょう。当時は「十字架」という言葉を口にすることすら憚られたのです。実際の刑罰の現場に居合わせたことのある人は、PTSD になったかも知れません。私たちにとっては、あまりに現実とかけ離れているため、主イエスが言われる事柄の重さが十分には分からないのです。

さて、十字架刑はその痛みの程度ばかりに目が行きやすいのですが、それに伴う精神

的苦痛にも目を留める必要があります。まず、囚人はこの世のすべての希望も大志も野望も捨てさせられます。体の機能は麻痺し、糞尿を垂れ流し、恥に恥が重ねられる。キリスト教では聖画や映画によって、十字架上の主イエスが輝かしく描かれ、そのイメージを払拭することはもはや困難なのですが、実際に十字架で亡くなった人の写真を目にすると、そのあまりに惨めな姿に言いようもない憤りを覚えるものです。

本論 2. 十字架を負うとは

主イエスが「十字架を負って従ってきなさい」と言われる時、弟子たちにご自分と同じ道（運命）を辿ることを求めておられることになるでしょう。ペテロが主イエスのことを「キリスト」と告白した時、主は彼に「あなたは尚も私に従ってきたいと願っているのか。これから私がどこへ行こうとしているのかが分かるか。もし従ってくるなら、その厳しさをよくよく認識しておかなくてはならない」と言われたことになります。メシヤに従っていくところに栄光があると、弟子たちは信じていました。確かにそうです。主イエスに従っていくならば、私たちは栄光を受けます。しかし、それは人間的な栄光ではありません。主イエスと同じ苦難にあずかり、蔑みの中で死に、自分の栄光をすべてかなぐり捨てたところにもたらされていく「逆説的な栄光」です。

では、「十字架を負う」とは、実際に十字架で死ぬということなのでしょうか。それだけではないことは、弟子たちの歩みを見れば分かります。確かにペテロは、伝説によれば逆さ十字架で死にました。しかし、ゼベダイの子ヤコブはヘロデの手によって剣で殺されました（使徒 12:2）。ヨハネは流刑に遭いましたが、殉教はせず、長寿を全うし、ヨハネの黙示録を書き、最後までエペソ教会に仕えました。このような人々について、私たちは「十字架を負わなかった」とは言えません。彼らはまことに主の十字架を担ったのです。「十字架を負う」という事柄の意味は、より広く捉えられなくてはならないでしょう。ルカは次のように解釈しています。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（ルカ 9:23）

ここに「日々」という言葉が入っています。僅かな違いではありますが、ここには「十字架を負う」という事柄がすべての人に適用される手がかりがあります。信仰者の負う十字架とは、日々の生活の中で見出されるものだということです。

兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。これは、私たちの主キリスト・イエスにあってあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓って言えることです。（Ⅰ コリント 15:31）
彼は何に死んでいたのでしょうか。私たちが日々死ぬべきものとは何か。それが、今日

の箇所で主イエスが言っておられること、「自分を捨てる」ということであると思われる。私はこの言葉の意味がずっと掴めず、探求し続けてきました。

私たちが「自己否定」という言葉を使う時、それは一般的にネガティブな自己イメージから出てくるものが多いと思います。親から肯定的な言葉をあまりかけてもらえなかった人は、自己イメージが低く、自分に自信を持つことができず、自分を否定する思考に支配され、それを口にしてしまう、あるいは行動に出してしまう傾向があります。それゆえに、人間のアイデンティティ確立のためには、「自己肯定」は避けて通ることができません。しかし、主イエスというお方の人格は、自己を完全に肯定することのできるものであったはずで。それは、罪がないからです。ところが、その完全なる自己肯定力をお持ちの主イエスご自身の口から「自分を捨てよ」という言葉が出てくるのです。恐らく、ここには全く違う意味が込められているのでしょう。

本論 3. 自分を捨てるとは

ここでポイントになるのは、主イエスのために自分を捨てるということです。「神のために」と言い換えてもよいでしょう。私たちの心の中には、多くの希望や願望があります。遣わされる場所、将来的な夢。様々な好き嫌いもあるかも知れません。特に、人間関係において、こういう人とだけは関わりたくない、避けたいという思いは少なからず誰にでもあるものではないでしょうか。しかし、主の働きに携わる時、すべての人が伝道と愛の対象となります。また、遣わされる場所においても、主が自分に望まれる場所はどこであるかという基準で考えます。つまり、自分の希望や願望以上に神の御旨が重要になるのです。すると、時に近親者や最愛の人の願い以上に、神の御旨を優先させなくてはならない状況も出てくるでしょう。そのような様々な選択を迫られる時に、神に対して Yes と言い、自分に対して No と言えるかどうかが問われてくるのです。次のパウロの言葉は、「自分を捨てる」という事柄を更に明らかにしています。

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。(ピリピ 3:8)

彼はピリピ 3 章前半において、自分の輝かしい経歴を明らかにしました。しかし、その上で「一切のものはゴミに等しい」と言い切ったのです。彼の中には、もはや人間的な栄光への執着心はありませんでした。これは真に人を解放する心ではないでしょうか。私たちがしがみついている多くの「この世のもの」があります。家族、職業、住居、趣味、交友関係、持ち物、自分の考え、計画、欲望、感情、意思……。これらのものをキ

リストのために手放していく。それが、すべての人に求められている「自分を捨てる」という生き方なのです。しかし、それは何でもかんでも無意味に捨てるということではありません。何かをギブアップしてしまうということでもない。主イエスが捨てることを求められた時に、それを手放すことができるかどうか問われるのです。

「十字架」という重荷は今や比喻として語られている訳ですが、これは病気や障害そのもののことを言っているわけではありません。主イエスが示される重荷、主の宣教の苦しみを共に担っていくための重荷であります。その重荷の内容は人それぞれ異なり、誰かの真似をして、誰かと同じものを担わなくてはならないということでもありません。クリスチャンの人生には必ず各々の「十字架」があるのです。

【証】

私自身のことを証しするのをお許してください。私は 35 歳になる頃、かつて経験したこともない二つの皮膚の病に冒されました。一つは薬品の副作用による全身の爛れ。もう一つはコリン性蕁麻疹という、体が熱に反応すると全身が針で刺されるような苦痛に襲われる厄介な病気です。今でこそ分からないくらいまで回復しておりますが、ここまで来るのに実に 4 年以上かかりました。講壇に立つことも、外を歩くことも、人と電話で会話することも困難になりました。もう牧会は無理なのではないかと思ったことがあります。しかし、主が私に求めておられることは違いました。「それでも私の働きを続けなさい」と言われているように感じたのです（ローマ 11:29）。私が「十字架を負う」ということを本当の意味で学んだのは、この時が最初だったのかも知れません。皆様の祈りに支えられて、今の私がいるのです。

【結論】

今日は「十字架を負う」「自分を捨てる」という二つの事柄を考えてまいりました。私たちが生きる現実には厳しさが伴います。生きる上での悩みは死ぬまで付きまとうでしょう。しかし、そのような現実を抱えていることをご存知の上で、主は「自分の十字架を負って私に従ってきなさい」と言われるのです。なぜか。そこに真の幸せがあるからです。主イエスは、父なる神様の御旨に従って生き、そして死ぬところに、人間にとっての真のアイデンティティがあることを知っておられました。私たちも主に従っていくならば、それを見出すことになるでしょう。どんなに小さな奉仕であっても、主が示してくださる十字架として、喜んで担い続ける人生を歩みたいと思います。

【祈り】

御子の命をもって私たちを贖ってくださった天の父なる神様。十字架を担われたのは主イエスだけではありません。父なる神様ご自身も御子を手放し、その命をささげ、私たち人間に仕えてくださいました。私たちもこの身をもってあなたにお仕え致します。私たちが担うべき十字架、手放すべき宝、それはいつも目の前に示されているでしょう。あなたの御声を聞き逃すことがありませんよう、お助けください。そして、自ら十字架を担っていくところに大きな喜びをお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
御子イエスを手放し、人類の救いのためにその命を与え給うた、父なる神の愛。
すべての人に先立って十字架を担い、従う者に同様の選択を求め給いし、主イエス・キリストの恵み。
己を捨て、己が十字架を担うところに、真のアイデンティティを見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。